

新潟大学理学部同窓会

会報

第24号 2023.09.01



理学部A棟



2023.6.18 理学部との懇談会



改修予定の理学部A 1棟





会報に寄せて

理学部同窓会会長 物理支部長
麿 沢 祐 一

今年度、会長を務めております物理支部の麿沢です。今年春からコロナ禍の規制が緩和され、元に戻りつつありますが、すぐに元通りというわけにもいかないようです。しかし対面ができることで、状況の変化を期待するものです。また、大学も活気が戻りつつあり、講義や実験、諸活動、行事など通常通りに行われることは、教育活動に大切なことですし、これこそが私たちの大学生活でありました。

私は、45年以上高校で物理を教えておりますが、教えることは難しいと感じます。時間的、金銭的なものなど様々な制約はさておき、物理を学びたいと選択した生徒に物理をきちんと教えて、身につけさせることを、私は大きな目標としております。具体的には、授業の始めに、授業内容のプリントを配布し、それを話し、必ず、内容の理解の確認、定着、発展まで意図したレベルの違う問題を解かせるようにしております。授業中に個々の生徒の様子を見て説明を繰り返すなど理解度を向上するようにもしております。また、物理の興味を引くような実験など演示も重要と考えています。しかし思い通りに生徒は理解していないようです。

これまででは、公式毎をひとまとまりの内容として理解させていたのですが、これでは個々の理解となり、内容と内容の関連性がつかみに難く、個々を理解するだけでした。

そこで、種々の公式を含む大きな分野の中で一貫した考え方「ストーリー」を考え、それを土台に授業を組み立てる工夫をしています。公式が単独ではなく、その分野の「ストーリー」を繰り返すことにより公式同士がつながり、分野を通した物理現象をより深く理解できると考えております。具体的には、電磁気の分野で、静電気、直流電流、電流と磁場、電磁誘導、交流電流がありますが、最初から電荷の動きがどうなっているかを常に「ストーリー」として話すようにしています。これによって、分野全体をより深く理解でき、それまでの知識から次の内容も容易に理解できるよう期待しています。

コロナ禍も明け、通常の生活が戻りつつある中、様々な活動をしていきたいと考えております。同窓生の皆様のご協力とともに、同窓会として、より一層新潟大学理学部が発展し、世界に向けて活躍されるように尽力してまいりたいと存じます。これからもどうかよろしくお願い致します。



理学部の近況

理学部長 大 鳥 範 和

新型コロナの感染症法上の位置づけが変更され、同窓会の皆様におかれましても日常生活の大部分がパンデミック以前に戻っていることと拝察申し上げます。今春も、卒業式と入学式が朱鷺メッセで、理学部卒業祝賀会がANAクラウンホテルで、それぞれ開催されました。理学部では、194名の卒業生を送り出して、210名の新生入生と10名の3年次編入生を迎えました。出席者を卒業生や新生入生・編入生およびその保護者1名に限定した式典ではありましたが、皆さんの晴れの姿を拝見できたことは誠にご同慶の至りです。改めて心からのお祝いを申し上げます。

「理学部は今」にも記載しましたが、このたび文科省による「大学の世界展開力強化事業」の申請が採択されました。特に地質科学プログラムのSatish教授と椎野准教授には、100頁に及ぶ申請書類とプレゼンテーションの準備をご担当頂きました。5年前の申請に対する捲土重来でしたが、その労が報われたことを同窓会の皆様とともに喜びたいと思います。この事業は、インドからインド工科大学（ルールキー校、カーンプル校）、インド理科大学、コーチン科学技術大学、インド宇宙科学技術大学、スリランカからペラデニア大学、オーストラリアからカーティン大学、マッコーリー大学、ウーロンゴン大学が参加し、本学を加えた10大学間で、学生の派遣と受入れを伴う従来の国際交流を基盤としつつ、オンラインも活用して人的移動を伴わない期間も交流を継続し、より実効性の高い教育を実施するものです。理学部ではこれを契機に、今年度より地球環境フィールドプランナー養成コースを設けて、この事業による教育を体系化しました。地質科学やフィールド科学を専門とする分野の学生に限定せず、門戸を全学に開放していますので、多くの学生が履修し、グローバル人材として成長していくことを期待しています。

一方、新潟ジュニアドクター育成塾の事業補助期間は最終年度となりました。後続の補助事業への応募および自立展開を含めた事業の継続策を検討して参ります。また、A1棟の改修工事は、今年も概算要求の選外となりました。来年度に向けて上記の世界展開力事業の採択を受けて、国際化を共創スペースの中心に据え直し改修のコンセプトを練り直しているところです。

来年度、本学は創立75周年を迎えます。これにあたって、全学75周年記念事業実行委員会が組織され、また理学部でも同様の組織を発足させました。記念誌に掲載する情報の収集には同窓会の皆様方のご協力を仰ぐ必要もあるかと拝察いたします。その節はどうぞよろしくお願い申し上げます。

プログラムだより

数学プログラム

プログラム長 田中 環

数学プログラムでは、橋詰健太先生が助教として本年4月1日に着任されました。ご専門は代数幾何学です。3年前には折田龍馬先生と大井志穂先生が着任されており、当プログラムもかなり若返り、今後の活躍が期待されています。2022年度は、2学期より対面授業が可能となり、久しぶりに学生の声がキャンパス内で聞こえるようになりました。しかし、この2年と半年間は学生・大学院生のゼミや研究活動が制限された中で、何とか学部学生37名、博士前期課程9名、博士後期課程3名(9月修了2名を含む)が卒業・修了されました。その中で数学プログラム4年生の大坂綾花さんと博士後期課程3年生の中野泰河さん、博士前期課程2年生の江幡隆典さんが新潟大学学生表彰を受けました。本表彰は、在学期間において極めて優秀な学業成績を修め、高い評価を受けた学生及び学術研究活動において特に顕著な成果を挙げ学界又は社会的に高い評価を受けた学生を表彰するもので、当プログラムでは昨年の2名に続く表彰となりました。また、当プログラムの渡邊恵一先生と折田龍馬先生が新潟大学優秀論文表彰の対象者50名(対象論文60編)に選ばれました。国際的に評価の高い学術雑誌に論文が掲載されたことが評価されました。

一方、数学プログラム講演会は久しぶりに理学部B303講義室で対面開催され、前期は7月27日に浮田奨氏(新潟県見附市役所)と秋本理恵氏(新潟市立白根第一中学校)から、後期は12月2日に川上泰史氏(新潟県立正徳館高等学校)と末崎かなえ氏(新潟市立万代高等学校)からご講演いただきました。また、理学部コロキウムも対面で行われるようになり、本年5月24日には渡邊恵一教授から「ジャイロベクトル空間の紹介」というご講演を頂きました。

物理学プログラム

プログラム長 早坂 圭司

2023年6月7日に物理学プログラムでは第21回ケルビン祭が3年ぶりに対面で開催されました。ケルビン祭では例年通り大学院説明会、学生表彰、学生教員対話集会、研究室紹介が行われました。学生表彰では、物理学プログラムに新たに配属された2年生対象の「同窓会新人賞」の受賞者である成績優秀な3年生(受賞時点では2年生)4名、物理学科第一期卒業生である中山高様からの寄付により設立された「中山賞」、および「同窓会奨励賞」の受賞者である成績優秀な4年生6名が表彰されました。「同窓会新人賞」と「同窓会奨励賞」は理学部同窓会のご支援により実現してお

り、この場を借りてご支援に感謝申し上げます。

学生教員対話集会では、学生から寄せられた講義の在り方や講義の新設、実際に学生が困っていることなどについて、率直に学生と教員の間で議論されました。このような生の学生の声も取り入れ、物理学プログラムでは学生の期待に応える教育研究環境の整備を継続していきます。

2022年6月30日に物理学プログラム主導で茨城県東海村にある大強度陽子加速器施設(J-PARC)に新潟大学分室が設置されました。J-PARCは世界最高強度を誇る陽子ビームを供給する施設で、分室の設置により本理学部の研究活動をはじめとして人材交流、人材育成、研究情報交換などが躍進することが期待されます。同時にJ-PARCの運営母体の1つである高エネルギー加速器研究機構(KEK)と新潟大学の間に研究協力協定が締結されました。これに伴い、KEKの西田昌平准教授がクロスアポイントメント教員として新潟大学に着任しました。西田先生はKEKで進行中のBelle II素粒子実験の国際共同研究者グループの物理解析副責任者を務めており、B中間子の電弱ペンギン崩壊過程、暗黒物質の探索を専門とされております。西田先生の着任により当該分野の教育研究の発展が期待されます。



化学プログラム

プログラム長 俣野 善博

化学プログラムの近況をご報告します。2022年度は、学部卒業生34名、大学院博士前期課程修了生21名を送り出しました。学部卒業生のうち、19名が大学院(うち16名が新潟大学自然科学研究科)に進学し、14名が民間企業、官庁等に就職しました。一方、修士号取得者は民間企業、官庁等に就職しました。なお、本年3月をもちまして長谷川栄悦教授が定年退職されました。長谷川先生は、昭和62年10月に新潟大学理学部に助手として着任され、助教授を経て、平成18年6月に教授に昇任されましたが、35年半の間、新潟大学の教育・研究・運営に多大な貢献をされ、数多くの学部生・大学院生を指導されました。また、長谷川先生は有機物質の光化学と電子移動化学に関する研究に取り組んでこられましたが、その功績により、昨年第22回光化学協会功績賞を受賞されました。長きに渡り本学の化学

分野を牽引して下さいましたこと、本紙面をお借りして心より御礼申し上げます。

さて、コロナ禍は大学教育や学生生活にも甚大な影響を与えましたが、昨年度途中から授業実施の基本方針が大きく転換され、今年度は多くの講義と実験が対面で実施されています。学生と教員の間で話をする機会も増え、キャンパスには以前の活気が戻りつつありますが、4月には、推薦入試とフロンティア・スタディ・プロジェクトで化学を選択した新入生の歓迎会を行いました。秋には、教職員と学生が一堂に会する縦コンも開催される予定です。また、今年4月より韓智海先生が分析化学分野の助教として着任され、今年度の教職員は計17名（教授6名、准教授6名、助教2名、職員3名；共用設備基盤センター教員1名を含む）となりました。将来の社会と科学を牽引する人材の育成と化学プログラムの発展をめざし、全員一丸となって教育・研究に取り組んでいます。同窓会の皆様には、今後とも変わらぬご指導・ご支援を賜りますようお願い申し上げます。



生物学プログラム

プログラム長 井筒 ゆみ

令和4年度（2023年3月）に生物学プログラムを卒業した学部学生は28名でした（※1、他2名が2022年9月に卒業していますが内訳には含まれておりません）。卒業生の内訳は、大学院進学18名、就職10名（企業6名〔県内1名、県外5名〕、教員1名、公務員2名、その他1名）と大学院進学者が多く、半数以上が引き続き研究を続ける進路を選択しました。コロナ禍のため制限があるなかでの、朱鷺メッセでの卒業式、毎年恒例となっているANAクラウンホテルでの「理学部系 卒業・修了祝賀会」（※2、数年前から大学院生も参加できるように理学部から「理学部系」と名称変更しました）も、後援会ならびに同窓会からのサポートによって無事開催できたことは大変うれしく思います。祝賀会では飲食なしでしたが、大きな垂れ幕のある会場で同級生らと記念撮影することができ、皆うれしそうでした。記念品などもいただきまして、この場を借りて後援会・同窓会関係者の皆様に心から

感謝します。

令和5年度の新入生は（2023年4月）理学科新入生210名のうち、1年生の最初から生物学プログラムで学べるFSP(Frontier Study Project〔入学時に希望するプログラムへの配属優先権が与えられ、自主ゼミや早期研究室体験などが可能な、研究志向のフロンティアを育成することを目的としたプロジェクト〕)の学生は4名、推薦入学者は6名、合計10名でした。10名の学生は、さっそく生物学プログラムに所属する各教員（教員数11名）の研究室見学をしました。研究を身近に感じてもらおうと毎年恒例で行われているのですが、コロナ禍での制限がほぼ無くなった今、学生たちは研究室で沢山質問をしたり、談笑したりと楽しそうです。動物、植物、分子・生化学という3つの柱をもとに生物学プログラムで展開されている研究テーマが、実際にどのような設備・機器を用いて行われているかを一足先に知るチャンスとなり、今後の学びにも力が入ることでしょう。その他の学生は2年生の2学期に希望のプログラムに配属されますが（※3、定員は余裕をもって設けられているので所定の単位を取ってさえいれば希望が通らないことはほとんどありませんのでご安心を）、2023年5月現在の生物学プログラム3年生は、26名となりました（※4、R5年度の生物学プログラムへの3年次編入生1名を含む）。来年度はいよいよ各研究室に配属され卒業研究に取り組むこととなります。専門の研究に取り組むまでには沢山の生物学実習を履修します。生物の実習の多くは3～4名のグループで協力しながら行うことが多いのですが、今後は、写真（表紙参照）のようにマスクで黙々と顕微鏡をのぞくだけのことも、オンラインでバーチャル実習をすることも少なくなるでしょう。生物プログラムでは、新入生に対して4月にちょっと豪華な新潟産食材がはいったお弁当をたべながら教員と学生との懇談会があります。また、秋には（※5、ちょうどプログラム配属を終えてという区切りなので秋、本当は夏にやりたい）生協で立食の懇談会というイベントがあるのですが、これまで控えてきましたが、今年こそは開催したいと思っています。そのときはまた同窓会の皆様には、暖かいご支援を賜りますようお願いいたします。

地質科学プログラム

プログラム長 小西 博巳

2022年3月、地質科学プログラムの3期目の学生10名が卒業し、3名が進学、土木建設関係に5名、一般企業に1名、自治体に1名が就職しました。また、博士前期課程修了者は、1名が進学、土木建設関係に3名、資源関係に1名、公務員（技術研究調査官）に1名、教員に1名、一般企業に2名が就職しました。また、2023年6月現在、3年生が26名、4年生が19名で

す。秋には、2年生が15名程度配属されます。

コロナ禍も落ち着いてきて、大学も徐々に平常に戻りつつあります。ほとんどの授業が、対面式に戻りました。3年生たちは7月の「地質の日」イベントの復活を計画しており、近隣の小中学生を招待する予定です。また、10月には大学祭が開催され、今年は展示だけでなく、「秘酔」も復活するでしょう。

地質科学科から地質科学プログラムに名称変更されましたが、野外地質調査能力の高い人材の育成は依然として重要な教育目標です。この点において、今後とも変わらず教育を進めていくつもりです。今後とも、皆様方の温かいご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。



自然環境科学プログラム

プログラム長 宮崎 勝己

自然環境科学プログラムでは、令和4年度は20名の卒業生を送り出しました。進路の内訳は大学院進学7名、就職12名(公務員3名、民間企業9名)、その他1名(公務員再受験)となります。

長く続いたコロナ禍による厳しい制約も、昨年度途中から段階的に解除が進み、6月の第2タームからは授業も対面が基本となりました。もちろんコロナの脅威が完全に去ったわけではなく、引き続き要所要所での対策は必要ではありますが、キャンパス内や理学部棟などの建物内も以前のような賑わいが大分戻ってきたように思います。しかしながら、現3、4年生の大部分は入学当初からオンライン授業が中心であり、対面授業への適応を含め、実際の教育活動の現場では様々な問題が生じているのも事実です。アフターコロナの教育体制については、引き続きあるべき姿を模索し続ける必要があります。

今年4月には、墨谷暢子先生が新たに自然環境科学プログラム主担当の准教授として着任されました。先生の研究分野は藻類の細胞生物学及び進化生物学で、特に葉緑体の分裂と細胞分裂との間の協調機構に関する優れた業績をお持ちであり、本プログラムまた理学部の教育研究の発展に大いに寄与していただけるものと期待しています。また昨年度、生物学プログラムに助教として着任された田崎英祐先生が本プログラムの副担当を務められるなど、何人かの先生方には副担当と

して本プログラムの活動を支えていただいています。

今年度は、光熱水費の大幅な値上がりや全学でのスペースチャージ制度の導入などにより、理学部また本プログラムは大変厳しい予算状況です。中期的には、今後の五月雨的な教員の定年退職を見越した教育プログラムやカリキュラムの改編といった、大きな課題に取り組まなくてはなりません。同窓会の皆様方におかれましては、より一層のご指導ご鞭撻についてどうぞよろしくお願いいたします。

フィールド科学人材育成プログラム

プログラム長 本田 明治

2023年3月に12名の卒業生を第3期生として送り出しました。フィールド科学人材育成プログラムの接続大学院コースとして、2021年4月より設置された大学院自然科学研究科の環境科学専攻「フィールド科学コース」から初めての博士前期課程修了者(修士)の10名を送り出しました。この4月からは理学部より8名、また農学部フィールド科学人材育成プログラムの卒業生、他プログラムや他大学等からも含め、24名が当コース博士前期課程に進みました(博士後期課程には3名進学)。

2022年8月のオープンキャンパスはオンライン開催だったため、高校生には本プログラムの研究活動の動画を主に視聴して頂きました。2023年度は対面実施が検討予定されていますので、コロナ前の水準に戻りつつある野外活動を中心とした本プログラムの「フィールド科学」の実践的な取り組みを存分に紹介できるものと期待しております。

奈良間教授の研究室では、2019年の北アルプスでの氷河の確認に続き、2022年には複数の雪渓が氷河であること確認しています。また今年は日本で4か所目となる山岳永久凍土の掘削も予定しています。またコロナ禍でストップしていた海外調査も再開され、昨年9月には3名の学生と一緒にキルギス共和国の天山山脈で氷河湖の現地調査を実施、この夏も現地調査が予定されています。

野口里奈助教2022年度に新規開講した「フィールド惑星科学概論」は、惑星探査機によって得られたデータの見方を学び、地球上の類似地形との比較を通して、実際には行けない太陽系天体を仮想フィールドとするユニークな講義です。

在校生にフィールド科学研究の魅力を知ってもらうフィールドナビを6月9日に大学図書館1階広場及び図書館ホールにてオンライン中継も実施するハイブリッド型で開催されました。今年は昨年を上回る95名の直接来場があり、「フィールド科学」への学生の関心が高まっていることを実感することができました。

コラム 翡翠の県石指定と地質科学プログラムとの関り

糸魚川フォッサマグナミュージアム 館長 竹之内 耕

翡翠が、2022年11月4日に新潟県のシンボル、県の石に指定されました。新潟県では、県の花(チューリップ)、県の鳥(朱鷺)、県の木(雪椿)、県の草花(雪割草)、県の観賞魚(錦鯉)に次ぐ指定です。糸魚川市は、国内唯一の宝石質な翡翠の産地であり、世界最古級の翡翠文化の発祥地としても知られています。翡翠の県石指定は、市民団体からの請願、署名活動、県議会での採択、有識者からなる検討委員会での評価をへて決定されたものです。

県石指定の基礎となった翡翠の科学的価値の発見やその保護施策については、地質科学プログラム(地質鉱物学科の時代を含む)の先生方が深く関わってこられました。また歴代の卒論・修論・博論によって翡翠を産する地質学的な特徴が明らかにされてきました。1939年に小滝川でのわが国最初の翡翠発見が公表され、1955年には茅原一也先生(故人)らによって青海川で新たな翡翠が発見されました。これらの二つの翡翠峡は、茅原先生・

西田彰一先生(故人)のご尽力によって国の天然記念物に指定されています。また縄文時代の長者ケ原遺跡や寺地遺跡から出土した翡翠の同定と化学分析は茅原先生が担当され、国史跡の指定につながっています。昨年の県石指定に関わる検討委員会には高澤栄一先生が参加されました。

このように、翡翠の県石指定にいたる背景には、長年にわたる地質科学プログラムの研究成果や保護施策への提言がありました。地元の地質博物館で働く者として、長年にわたるご研究とご尽力に心から敬意を表し、厚くお礼申し上げる次第です。このたびの県石指定を契機に、翡翠やそれを育んだ大地の歴史、翡翠文化をさらに多くの県民のみなさまに知っていただくことを願ってやみません。



翡翠太殊(たいしゅ)

全学同窓会からのお知らせ

▶ 各種イベント・事業の再開

令和4(2022)年度は7月に新潟大学・全学同窓会懇談会、10月に新潟大学・全学同窓会交流会の講演会を対面で実施いたしました。新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、懇談会後の懇親会は行わず、10月の交流会およびその後の懇親会も規模を縮小して実施いたしました。残念ながら、コロナ禍による事業計画の縮小は継続せざるをえず、運営委員会・理事会等の会議も必要最小限(書面審議など)の活動となりました。学生のサークル活動

なども種々の制限がある状況でしたが、「雪華支援事業」では前年よりも応募件数が増加し、21件の事業が採択されました。

▶ 賛助会費納入のお願い

前述の「雪華支援事業」の予算は同窓生からの賛助会費を原資としています。事業の拡大・充実のためにも全学同窓会の賛助会費の納入をお願い申し上げます。



支部だより

数学科

支部長 轡田 勝祐

支部役員会は5月13日にオンラインで開催され、前年度報告・決算、本年度計画・予算を承認いただきました。5月18日に開催された理学部同窓会役員会にて報告しました。なお、支部役員メンバーは継続いたしました。近況報告として「学科活動補助」の内容をお知らせします。

令和4年度は、「数学プログラム」の取組への支援をほぼ自粛していましたが、その中でも『数学プログラム講演会』に補助することができました。令和5年度は、次の行事への支援を行うことを計画しました。

- 『数学プログラム講演会』
- 『理学部オープンキャンパス』
- 『新潟大学WeeK「卒業生と在校生の交流会」』

これらの行事への補助として総計12万円を支部の予算に計上しております。また、理学部同窓会の「支部事業補助費」を申請することになっています。なお、「数学プログラム」の今後の『高大連携事業』や『国際会議事業』に支援していくことも検討します。ご協力の程よろしく願いいたします。

結びに、新潟大学理学部は2024年に創立75周年を迎えることをお知らせします。会員の皆様には、理学部数学科へのそれぞれの思いを抱きながら、今後も同窓会活動に一層のご理解とご協力をお願い申し上げます。

物学科

支部長 麿沢 祐一

物理支部は、昨年同様、ケルビン祭が開かれる時に、物理プログラムの学生に対して、3年生の優秀な学生に同窓会奨励賞として1万円の図書券を3人に、2年生に同窓会新人奨励賞として5千円の図書券を4人に、贈呈しております。今年から、ケルビン祭が復活しておりますが、昨年はコロナ禍のため行われなかったのですが、贈呈いたしました。

これからも、学生の皆様をより一層支援してまいりたいと考えていきたいと存じます。どうかよろしくお願い致します。

化学科

支部長 畠野 弘通

同窓の皆様、いかがお過ごしでしょうか。第9波のコロナだけでなく、他の感染症も広がっています。感染を避けるためのリモートワークに留まらず、生成系AIの発達で、教育・行政・企業等に変化が生じています。シンギュラリティに到達するのも遠くない気がします。

役員の方々のご協力のもと、学部同窓会の役員会・代議員会、理学部との懇談会には対面で参加できました。しかし、他にメール審議、ZOOM会議のこともあり、高大連携事業や卒業生と在校生の交流事業は、実施できませんでした。コロナの収束を願うばかりです。

化学科支部の活性化を図るため、役員会を、6月に開き、11月にはもう一度、開く予定です。支部の活性化と学生支援を図るため、新規事業、継続事業を引き続き募っています。学部事務局を通して、お尋ねいただければ幸いです。

今年もご支援、ご協力を賜りますよう、役員一同、よろしくお願い申し上げます。

生物学科

支部長 荒木 勉

同窓生の皆さん、いかがお過ごしでしょうか。

新型コロナウイルス騒動も、感染症法の2類から5類へと移行・格下げされ、マスク着用を含めて多くの行動が個人の判断に任されるようになりました。しかしながら、まだまだ警戒が必要なのかなと感じております。

さて、昨年度も、生物学科支部では、新型コロナウイルスの流行に託けて、活動らしきことはほとんどありませんでした。お詫び申し上げます。いま、生物学科支部にとって喫緊の課題は、いかに代替わりを行うかです。昨年度、この会報でもお願いいたしましたが、変化はありませんでした。是非、私どもより若い方々に、事務局員、代議員に名乗りを上げてください。遅くとも秋には、新潟県内在住の皆さんへ、改めて文書でお願いを送付させて戴きます。

是非、よろしくお願いいたします。

○ 資料提供のお願い ○ 古いお写真をご提供ください

新潟大学ならびに理学部は令和6（2024）年に創立75周年を迎えます。この機にフィルムカメラ時代の貴重な写真資料を収集したいと存じます。ご提供いただいたお写真は、電子化した後、お返しいたします。皆様のお手元に、もし学生時代を過ごした新潟大学のキャンパス風景、あるいは各種イベント等を撮影したお写真がございましたら、理学部同窓会事務局（連絡先：会報の末尾）までご一報ください。ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、2020年度以来中止であった「地質の日」のイベントですが、本年度2023年7月17日に新潟大学理学部内にて久々に開催される予定です。昨年度の新潟大学Weekの「地質科学科の未来に向けて：卒業生と在校生の集い」は2022年10月16日にオンラインで実施されました。参加者は64名でした。オンライン開催のため、支部の支援は同窓生へのメール案内等にとどまりました。今後、「地質の日」のイベント同様、各種イベントを通じ、卒業生・在校生・教員の交流・懇親が対面で深められることが望まれます。今年も中止となった支部新年会も、2024年には開催できればと考えています。

2023年度の集中講義「土土地質学」は、池田伸俊氏（昭和59年度卒、株式会社 興和）に担当をお願いし、対面授業を行う予定です。

地質科学プログラムから当支部に、日本技術者教育認定機構(JABEE)プログラムの認定継続審査料への寄附が要請されました。これを受け、当支部役員会で検討した結果、当支部の特別会計(理学部同窓会発足前の地質鉱物学科・地質科学科同窓会時の預金)から、審査料補助のための寄附を行いました。今後もJABEEプログラムによる教育の継続が望まれます。「野外地質調査・野外調査に基づく研究なら新潟大学理学部の地鉱・地質」と言われる伝統が続くよう、当

支部はこれからも教室への協力を続けていきます。



いつも同窓会の活動にご理解とご協力をいただきありがとうございます。新型コロナウイルスの感染症法の位置づけが5類感染症になってから、徐々に元の生活が戻りつつあるのではないのでしょうか。同窓会の活動も状況に応じて対面とオンラインを使い分けながら実施しています。これまで自粛していた懇親会も今年度から再開することにしております。

さて、昨年度の活動を報告します。幹事会の開催とオンライン総会、図書の寄贈という最小限の事業となりました。詳細は、同封されている文書をご覧ください。今年度は役員に新しいメンバーを加えることができました。同窓会業務をより着実に実施していくことができたかと考えています。そして、同窓会会則が現在の状況に合わなくなってきているため、特に後輩支援事業について見直しを進めていきます。

皆様に対して報告できる内容が乏しく申し訳ありません。今年度は活動の盛り上がりを取り戻せるように事業を企画していきます。みなさんの状況が許せば可能な範囲でご参加いただき、仲間とやり取りすることが日常生活のちょっとしたアクセントとなれば幸いです。

首都圏同窓会

と私

理学部首都圏同窓会の現況

首都圏支部長 安藤 勝利

日頃の理学部首都圏同窓会へのご理解ご支援に感謝します。

首都圏同窓会におきましては、コロナの発生の年から昨年度まで総会を見送ってきました。

しかし、コロナが落ち着いてきたことから昨秋幹事会を開催し、今年度は例年の春(6月頃)開催から秋開催(10月28日)に変更し、幹事会の日程に余裕をとり、コロナの動向を観測しながら総会に向けた準備作りを行うことにしました。

例年使用している東京新潟県人会館もリニューアルし総会会場も新しくなり設備が整ったことから会場においてのリモートでの発信環境のチェックも行ってきました。

理学部首都圏同窓会は総会前にサイエンスセミ

ナーを行っております。今年は大鳥理学部長はじめ、豊島理学部教授と産総研地質調査総合センターの宮下様を講師としてお招きすることになりました。総会に続く懇親会の開催については、今後の状況を見守りつつ柔軟に対応しようと考えております。

コロナによる3年間の同窓会活動のブランクによる会員の意識が薄れていることが最も懸念されます。今後はPR活動を含め、秋の同窓会総会の開催に向けて幹事一同全力で頑張っていきたいと思っております。

皆様におかれましては、今秋の理学部首都圏同窓会に集い新しい知見に触れ、旧交を温めるよう奮ってご参加下さいますことお願い申し上げます。

今後とも理学部首都圏同窓会の活動に対し、ご支援ご協力をお願いいたします。

若手卒業生から（実社会に出て）

数学プログラム

2022年卒 近江 祐哉

私は、理学部を卒業し、大学院自然科学研究科に進学しています。今まで以上に数学の知識を学ぶとともに、研究室の先生、先輩方と交流が増え、楽しく大学院生活を過ごしています。



ところで、私の好きな言葉に「同期発火」という言葉があります。これは、一人の小さな力では目標を達成できないことも多くの人々が力を合わせることで、目標を達成することができるという意味です。数学のセミナーでは、一人では分からなかった証明を、先生、先輩方に協力していただきながら考えると、証明ができたということがあり、この達成感は今でも忘れられません。今後も大学院の研究が続き、様々な出来事に直面すると思います。しかし、新潟大学理学部で学んだ経験を活かして一步一步成長していきたいと思っています。

物理学プログラム

2022年卒 新保 南歩



私は現在、新潟大学理学部物理学プログラムを卒業し、新潟県の中学校で講師として働いています。教科は理科を担当しています。新潟県で学校の先生に成りたいという思いで新潟大学に編入学して、夢を実現することが出来ました。

私が勤務している学校では、理科の教員が一人で最初はとても不安で一杯でした。しかし、理科の授業を行う中で「理科の実験が好きだ」という声や「もっとこんな実験をしてみたい」などという理科を楽しんでいる姿を見るのがとても楽しく、教員という仕事にやりがいを感じております。

新潟大学で学んだ教育に関わる知識や科学の探求する力を生かして、理科の面白さや奥深さを伝えられるように日々精進していきたいです。

化学科

2020年卒 佐藤 悠那

2020年に理学部化学科を卒業、2022年に自然科学研究科で大学院修士課程を修了しました。大学・大学院での研究活動からものづくりに携わりたいという思いが強くなり、現在は素材メーカーで働いています。約3ヶ月の研修を経て希望していた研究開発の部署に配属され、今は主に新素材の開発と既存製品の改良を行っています。最初は業務に慣れるのに必死でしたが、



最近は1人でできること・任せてもらえる仕事が増え、着実に増えていくことに楽しさを感じています。それでもまだ、毎日学びの連続です。同じ研究開発でも学生と社会人では意義や目標などが大きく異なることを日々実感しています。これからも必要な知識と技術をたくさん吸収して開発者として活躍出来るように日々の業務に励んでいこうと思います。

生物学プログラム

2022年卒 加藤 秀



「私の家政夫ナギサさん」というドラマをご存知でしょうか？私は2022年3月に新潟大学理学部を卒業し(2021年度卒)、現在、そのドラマで多部未華子演じる相原メイと同じMRとして働いています。仕事内容は、医師を始めとする医療従事者と面談を行い、自社医薬品の情報提供や適正使用を促すことがメインです。仕事で求められることは、臨床データを正確に読み取り、どのような患者さまに役立ててもらえるか、どう伝えれば医療従事者に納得してもらえるか、という能力です。学生時代、生物の実験をして失敗だと思った結果に対し多角的な視点を持つことで新たなアプローチを見つけた経験、自分より知識のある人(教授)に対して自分の考えを提示しディスカッションをした経験、これらが大いに役立っていると感じるとともに、自分の長所でもあると気付かされました。経験や長所を発揮できる環境で、今は楽しく仕事をしています。これもまた「研究」や「生物」から派生して多角的な視点を持った結果なのかも知れないと思っています。

地質科学プログラム

2021年卒 千葉 響

私は2023年に大学院修士課程を修了し、原子力規制庁で勤務しています。原子力規制庁は日本に存在する電力会社や研究用等の原子力施設の審査を行い、安全を確保するために存在します。私は研究職として、地震や津波などの自然現象に対して抱える原子力施設のリスクについて研究しています。大学では断層に関する研究を行い、現在でも活断層に関する研究を行えています。しかし、目標が原子力分野での安全研究であり、行っている研究が安全研究に役立つのが重要な点です。このように大学とは目標設定が異なることがあり、戸惑ってしまうこともあります。しかし、原子力分野を勉強する過程や震災を経験したという経験から、福島で起こったことを二度と起こさせないという強い決意があるため、確実な安全のために今後努力していきます。





私は大学院の自然科学研究科を卒業して、塾会社に就職しました。最初の1年は研修を積み、今年の4月から千曲市で新たに教室を出し、そこでは教室長という立場で毎日頑張っております。大学で学んだ専門知識が直接関わる仕事ではありませんが、教室運営のスケジュール管理や保護者に向けた資料作りでは、大学時代を通して培った論理的思考が役に立っていると感じています。今後、やりがいを感じる場面や苦しい場面が多々あると思いますが、大学や大学院時代に教員・先輩方々から学んだことを忘れず、教育業界や地域の皆様に貢献していきたいと思っています。



私は新潟大学理学部を卒業後、航空大学校に進学してパイロットになるための勉強をしています。厳しい訓練ですが、日々新しい知識を得られるやりがいや初めて一人で空を飛べたときの感動は何ものにも代え難い経験になっています。

『操縦席に座ったとき、フライトの9割が終わっている』と言われるほど事前準備が大切で、フライト前にはその日の注意点を洗い出すブリーフィングと呼ばれる打ち合わせを行います。そこで特に重要になるのが天気で、毎朝天気図を解析して雲の様子や風の変化を読むことで訓練実施の可否を判断します。私は大学時代に気象学を専攻しており、そこで学んだ知識を十分に活かすことができる良い機会になっています。

今後は事業用操縦士としてプロのパイロットを目指す課程に入ります。高い操縦技能や幅広い知識を身に着けるだけでなく、将来多くの人の命を預かる立場としての責任感や人間性を育てていけるように自分に厳しく取り組んでいきたいと思っています。

理学部同窓会特別会費

拠出者御芳名(敬称略)

令和4年7月～令和5年6月

● 数学科支部

渡辺 雅之	永井 健樹	響田 勝祐	林田 秀一
土屋 和平	井村 悦子	丸山 善久	玉田 鉄平
伊藤 道一	小林 祥一郎	細野 晃	於島 靖
佐藤 英男	石田 雅義	飯田 昭男	斎藤 裕
岩田 隆子	松下 利男	富田 保宏	佐々木 潔朗
畠山 トシ	山口 真理	田中 環	伊藤 真知子
堀 行	繰 詳子	安田 浩幸	高橋 峰洋
上野 正勝	日比登 史男	小湊 知見	清塚 拓也
松村 芳郎	伊東 孝芳	佐藤 浩一	江幡 隆典
樋浦 卓嘉	福田 世喜	二瓶 静男	
伊豆野 泰弘	吉成 毅	上川 芳浩	
井上 昭導	原 幸仁	小川 正樹	
金子 正義	山本 俊一	安蔵 顕一	
高橋 哲夫	青木 孝史	角井 伸一	
岩田 博和	竹内 正文	牛丸 智博	

● 化学科支部

伊藤 良夫	吉川 義雄	佐山 久	田邊 薫	小野 啓子
玉木 恵子	村松 信輔	本間 泰紀	三上 正人	山田 幹
梅澤 貞雄	羽角 孝	百瀬 衛	飯田 英典	近藤 健一郎
田巻 繁	殿内 重政	山口 健治	早川 靖	千葉 直樹
佐藤 典	星 和彦	羽深 等	宮本 良弘	長谷川 太一
塩畑 ヒサ	土屋 真知子	尾崎 恭子	斎藤 博之	井上 和也
松澤 澄江	井越 裕栄	山岸 良一	友美 滋樹	長沼 典子
佐藤 茂司	星崎 俊雄	青柳 義昭	田澤 友英	伊藤 統
半田 進	山崎 洋子	滝澤 貞親	石山 浩一	新関 達也
赤沢 宏	藤田 省三	吉井 文子	稲野 橋本	
岡本 紀子	昌野 弘通	川俣 治	板垣 健	
岩野 宜哉	坂本 憲司	三ッ寄 敏雄	小川 浩	
富士盛 良一	二瓶 直子	中野 国芳	安田 健一郎	
青木 英二	東田 良和	淡路 明	吉田 勝美	
		森田 朗		

● 物理学科支部

森山 久夫	鈴木 陽典	須藤 雅明	金谷 均
鈴木 政光	白川 保憲	川田 尚	菅野 義博
坂部 充孝	岸 澄夫	三浦 元	高田 和樹
熊谷 周二	八木 隆志	鈴木 重行	野地 隼平
柳 雄三	青柳 秀夫	有馬 敏幸	樋山 舜崇
畑野 清司	阿部 信夫	斎藤 司	
滝澤 進	金澤 光隆	高橋 透	
寺井 宏	上林 俊一	伊藤 嘉亮	
松本 一忠	佐藤 三男	山岸 靖宏	
小林 一男	高見沢 一男	赤坂 俊彦	
丸山 敬	中村 一昭	佐藤 修	
本間 正宣	渋谷 孝雄	山田 徳昭	
小川 稔	長谷川 正志	黒沢 昌基	
橋本 俊彦	時武 康雄	中嶋 悟	
海老名 郁夫	牧口 一男	伊藤 静香	
渡辺 俊英	鈴木 俊男	五十嵐 啓広	
小海 哲	水谷 洋二	榎原 靖夫	
渡辺 孝一	前田 義憲	小関 賢	
垣内 信夫	矢代 博行	山崎 美穂子	
藤井 博	石川 富二男	本田 瑞枝	

● 生物学科支部

末武 勘十郎	長谷川 英男	佐藤 克美	笹川 通博	松本 真実
大森 康正	大西 みち子	木本 鑑乘	伊東 達朗	山崎 浩太郎
酒井 芳男	久和 彰江	富永 弘	茂木 守	桐山 真由子
古旗 恂	荒木 勉	信田 庸二	藤原 信一	木村 太郎
伊東 和江	別府 英宣	北川 智士	猪熊 正則	菅野 翔希
清水 榮一	丹羽 潤	古山 昭子	頼所 裕史	
長谷川 博	白田 誠	小河 修	佐々木 哲	
星野 嘉恵子	林 正栄	田丸 幸一	門脇 康之	

● 地質科学科支部

倉又 孝夫	佐藤 和平	飯野 芳則	渡部 直喜	山崎 晴香
畑中 博文	本多 豊	清水 功	佐久間 幹	長谷川 千博
山岸 俊男	深澤 光	小山内 康人	小島 玄生	大圖 明日香
加藤 靖夫	大久保 進	五十嵐 聡	長江 晋	谷 雅史
山野 井 徹	佐々木 衛	北脇 裕士	松永 聖子	藤井 健太郎
吉田 慈	中水 勝	滝本 俊明	田利 信二	鈴木 望夢
小村 寿夫	薦田 靖志	大河内 誠	小川 乃絵	
二瓶 文雄	横堀 正純	柿崎 聡	長谷川 洋子	
岡田 正明	中川 充	佐藤 壽則	長谷川 怜思	
笹川 一郎	武田 茂典	柚原 雅樹	八木 郁恵	

● 自然環境科学科支部

小川 尚之	天笠 泉	杉山 博崇
-------	------	-------

● 旧職員

渡部 剛	徳江 郁雄	溝田 忠人	鈴木 俊雄	濱口 哲
中田 のり	石塚 紀夫	吉原 久夫	田村 正子	

表1

2022年度 理学部同窓会決算

一般会計

	費 目	予算額(A)	決算額(B)	比較(B-A)	説 明
収入の部	終 身 会 費 ・ 寄 付 金	5,000,000	5,031,000	31,000	
	終 身 会 費	4,000,000	3,960,000	-40,000	新入生198名×20,000円
	寄 付 金 等	1,000,000	1,071,000	71,000	ゆうちょダイレクトは248名、らくうるカードは41名
	他 会 計 繰 越 金		0	0	
	雑 収 入	80,000	69,387	-10,613	預貯金利息、全学同窓会資料会員配送費清算、等
	前 年 度 繰 越 金	2,733,650	2,733,650	0	現金、第四北越銀行普通預金、ゆうちょ通常貯金、ゆうちょ振替貯金
	合 計	7,813,650	7,834,037	20,387	
支出の部	会 議 費	175,000	39,347	-135,653	諸会議交通費、会場費
	広 報 費	1,950,000	1,854,909	-95,091	
	「会報」発行費用	400,000	376,475	-23,525	理学部同窓会誌「会報23号」(7,500部)印刷代
	「理学部は今」発行費用	450,000	486,431	36,431	理学部機関誌「理学部は今」(7,500部)費用分担
	会員宛資料配送費	1,000,000	986,165	-13,835	6,921名分 その他資料印刷費・配送運賃
	そ の 他	100,000	5,838	-94,162	H P 運営費
	事 業 費	1,265,000	391,070	-873,930	
	理学部支援事業費	720,000	339,240	-380,760	グローバル人材育成推進事業支援無し・卒業記念品
	支部事業補助費	450,000	0	-450,000	各学科支部へ助成無し
	名 簿 編 集 費	20,000	0	-20,000	
	そ の 他 事 業 費	75,000	51,830	-23,170	特別講演会ポスター・講師謝礼・消耗品等事務費
	負 担 金 等	489,350	491,530	2,180	全学同窓会賦課金
	支 部 交 付 金	460,000	461,215	1,215	50,000円×6支部+首都圏支部160,000円=460,000円
	事 務 諸 経 費	123,000	89,243	-33,757	光熱水費、郵送料、払込手数料・料金、印刷費、消耗品、等
	事 務 局 費	400,000	479,800	79,800	事務局人件費
	人 件 費	200,000	0	-200,000	後援会パート手当なし
	予 備 費	1,751,300	133,301	-1,617,999	ノートパソコン及び関連ソフト、予備費・調整費
	他会計(積立金特別会計)繰越金	1,000,000	1,500,000	500,000	
	合 計	7,813,650	5,440,415	-2,373,235	

積立金特別会計 出納

特別会計	費 目	収 入	支 出	残 高	説 明
	2021年度までの積立額			17,500,504	定期預金(利息は一部を除き一般会計預金口座に振替)
	繰 入 金 ・ 繰 出 金	1,500,000	0	19,000,504	
	定期預金元金振替分の利息	44		19,000,548	その他の利息は一般会計預金に振り替え

表2

2023年度 理学部同窓会予算

一般会計

	費 目	前年度予算額(A)	今年度予算額(B)	比較(B-A)	説 明
収入の部	終 身 会 費 ・ 寄 付 金	5,000,000	5,000,000	0	
	終 身 会 費	4,000,000	4,000,000		新入生入学定員200名×20,000円
	寄 付 金 等	1,000,000	1,000,000		会員等からの特別会費及び寄附金等(目標額)
	他 会 計 繰 越 金	0	0		
	雑 収 入	80,000	80,000	0	利子、全学同窓会発送資料同封手数料交付金、支部補助精算金等
	繰 越 金	2,733,650	2,393,622	-340,028	現金、第四北越銀行普通預金、ゆうちょ通常貯金、ゆうちょ振替貯金
	合 計	7,813,650	7,473,622	-340,028	
支出の部	会 議 費	175,000	175,000	0	諸会議交通費、会場費等(コロナ前の実績を参考)
	広 報 費	1,950,000	1,910,000	-40,000	
	「会報」発行費用	400,000	400,000	0	理学部同窓会誌「会報24号」印刷代 前年度決算額を参考
	「理学部は今」発行費用	450,000	500,000	50,000	理学部機関誌「理学部は今」費用 前年度実績を参考
	会員宛資料配送費	1,000,000	1,000,000	0	会員宛会報などの郵送料・運賃等 運賃改定・会員増を勘案
	そ の 他	100,000	10,000	-90,000	H P 運営費等(前年実績を参考)
	事 業 費	1,265,000	1,265,000	0	
	理学部支援事業費	720,000	720,000	0	コロナ前の実績を参考
	支部事業補助費	450,000	450,000	0	〃
	名 簿 編 集 費	20,000	20,000	0	(名簿作成業務は外部に依頼)
	そ の 他 事 業 費	75,000	75,000	0	特別講演会事業費
	負 担 金 等	489,350	500,000	10,650	全学同窓会賦課金 500万円×学部定員数で按分+定額30,000円
	支 部 交 付 金	460,000	460,000	0	50,000×6支部+首都圏支部160,000
	事 務 諸 経 費	123,000	123,000	0	光熱水費、事務通信費、払込手数料・料金、印刷代、消耗品、パソコンOS
	事 務 局 費	400,000	500,000	100,000	事務局人件費 前年度決算を参考
	人 件 費	200,000	0	-200,000	後援会パートなし
	予 備 費	1,000,000	1,000,000	0	2023年度積立金(昨年度積立実績は1,500,000)
	他会計(積立金特別会計)繰越金	1,751,300	1,540,622	-210,678	
	合 計	7,813,650	7,473,622	-340,028	

特別会計 収支予算

特別会計	費 目	収 入	支 出	残 高	説 明
	2022年度までの積立額			19,000,548	定期預金(利息は一部を除き一般会計預金口座に振替)
	2023年度 積 立 額	1,000,000		20,000,548	
	2023年度 利 息	44		20,000,592	定期預金利息の内、定期元金に振替えられる分 前年並みを計上

事務局より

1. 2023年度理学部同窓会

「役員会・代議員会合同会議」の開催

- ・2019年度の総会以来、4年ぶりとなる対面での開催であった。
- ・会議後、「理学部との懇談会」が行われ、有意義な意見交換が行われた。(表紙懇談会の写真)

<議 事>

- (1) 2022年度事業報告・決算報告
 - ・事業報告(下記2)・決算報告(別表1)及び会計監査報告が行われ、原案通り承認された。
- (2) 2023年度事業計画・予算案
 - ・別表2の通り提案され、原案通り承認された。



2. 2022年度事業報告

(1) 広報活動

- ・正会員に会報23号の送付。「雪華」は作成が遅れたため次年度送付とした。

(2) 理学部からの要請にもとづく各種事業

- ・祝賀会が縮小されたため、卒業記念品(同窓会名入りボールペン)を贈呈した。
- ・グローバル人材育成プログラムはコロナ禍で実施されなかった。
- ・高大連携アドバイザーへの支援を行った。

(3) 全学同窓会との連携

- ・賦課金・分担金を応分負担し、財政的に貢献した。
- ・各種会議に出席し、運営に貢献した。

(4) 会費及び寄付金について

- ・後援会と連携し、2022年度新入生より会費を徴収した。
- ・財政力強化のため「整備・振興寄付金」を「特別会費」と名称変更し、振込方法を複数化した。
- ・例年どおり多くの方からご寄付を頂いた。

(5) 特別講演会について

- ・期日：2022年6月19日(土) 総会の前段で開催
- ・講師：上越教育大学 教授
林田 秀一(数学科45回生)
- ・演題：合同数について
(古典的な数論の問題と現代の数学)
- ・Zoomを使用したりリモート講演会

2023年度 理学部同窓会役員名簿					
役 職	支 部	氏 名	役 職	支 部	氏 名
会 長	物 理 学 科	麿 祐一	幹 事	化 学 科	本間 悟
副会長	数 学 科	轡田 勝祐			田辺 薫
	物 理 学 科	麿 祐一			清水 榮一
	化 学 科	畠野 弘通		生 物 学 科	長谷川 博
	生 物 学 科	荒木 勉			堀 昌明
	地 質 学 科	豊島 剛志		地 質 学 科	関谷 一義
	自然環境科学科	尾原 祥弘			佐藤 壽則
	首 都 圏	安藤 勝利			渡部 直喜
幹事長	地 質 学 科	渡部 直喜		自然環境科学科	畑澤 尚宏
幹 事	数 学 科	武石 文雄			加藤 直之
		轡田 勝祐			柿原 芳章
		田中 環			安藤 勝利
	物 理 学 科	鈴木 重行		首 都 圏	飛鳥 滋
		坂井 章			信田 庸二
		笹川 民雄		数 学 科	若杉 和哉
	化 学 科	三ッ寄敏雄	監 事	自然環境科学科	志賀 隆

転退職された先生方(令和5年3月)

退職 化学プログラム

長谷川 英悦(教授)

在職期間：昭和62年10月～令和5年3月
専門分野：有機化学

◆◆ 編集後記 ◆◆

今号の編集は地質科学科支部が担当しました。

お忙しい中、原稿をお寄せいただいた皆様には、心より感謝申し上げます。また、原稿の依頼・収集及び掲載写真の選択等にご協力をいただいた理学部同窓会事務局の長谷川様、武石様に感謝申し上げます。

今号では、表紙を写真で埋め尽くしました。各プログラムの様子が一目でわかるような工夫です。会員の皆様の「読んでみたい気持ち」をくすぐる意図を凝らしてみました。いかがだったでしょうか。

写真を多用することについては肖像権の課題がありましたが、各プログラム長や著者から肖像権に配慮(ご本人承諾や特定不能など)した写真をご提供いただきました。ありがとうございました。

校正については、編集担当の責任校正とし、誤字脱字の修正以外は、著者のご意見を尊重することとしました。至らない点はご容赦願います。

今後とも同窓会活動に皆様のご協力をお願いいたします。

新潟大学理学部同窓会(事務局)

住 所 〒950-2181
新潟市西区五十嵐2の町8050
新潟大学理学部内
T E L 025-262-6261
E-mail ridoso@ad.sc.niigata-u.ac.jp
U R L http://www.ridoso.jp/